

十段物語



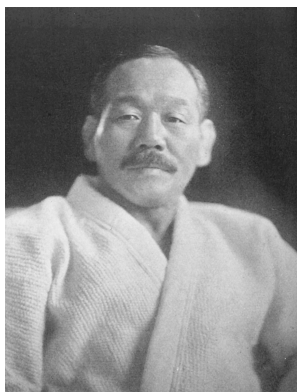
第3回

和而不流 永岡 秀一
(和して流れず)

ひでいち
秀一

本橋端奈子

岡山での少年時代



永岡秀一十段

永岡秀一は明治9（1876）年9月7日、岡山藩士・永岡知毎の長男として岡山県忍屋敷に生まれた¹。持病に胃弱と胸膜炎を持っており、体もひどく小さく、いわゆる虚弱体質の子供であった²。両親にも長生きは諦められていたが、それでも相撲など体を動かすことは好きで、「蚊の脛^{すね}」や「針金山」という弱々しい四股名にもめげず、永岡は友人とよく相撲を取っていたようである。ただ、やはり体の大きい相手には全く

歯が立たず、投げられる度に悔しい思いをしていたという。そして、投げ飛ばされた相手を見返したい一心で、永岡は柔術を始めることを決意する。明治19（1886）年、11歳の時であった。

初めに彼が入門したのは家の近所にあった竹内流^{たけうちりゅう}の安田道場である。しかし、ここでは形の稽古が主で、乱取などのもっと激しい稽古を望んでいた永岡にはどうも物足りなかった。そこで、半年ほどで、岡山県紺屋町の開閑寺にある野田権三郎主宰の練武館に移り、ここで起倒流を学ぶこととなった³。柔術を始めたばかりの頃は、近所中から「明治の今時何を」と随分嘲笑されたようである。しかし永岡本人は、体は丈夫になってきて腕も上達するので面白く、何を言われても気にせず熱中して稽古に励んでいた。この頃の稽古について、永岡は以下のように振り返って

いる。

(野田権三郎の)道場では相手と組んで練習する場合、一方の手を脇下に入れ、他方の手で相手の腕を抱えるという組み方をしていた。だからその掛ける技は横捨身とか浮腰とかが主になって、しげんにそれらの技の練習が多いという有様であった。だから私も平生から捨身技の身体の捨て方や受け方を盛んに練習させられたものである⁴。

このような練習のお陰で、捨身技の呼吸や根拠については岡山にいる内から大分会得していたようで、その技は、「野田の小天狗」と称されるほど上達するに至っていた。

永岡が起倒流を学んで5年ほどたった頃、練武館道場に一人の青年が訪ねてきた。二重マントを身につけ如何にも堂々とした態度のこの青年は、「東京の嘉納門下、馬場七五郎⁵」と名乗り、練武館に対して他流試合を

願ってきたのである。練武館側は、この挑戦を受けて立ったはいいものの、出る者出る者簡単に馬場に投げ飛ばされ、永岡でさえも初めて見る技に一溜まりも無く投げられてしまい、まさに完敗であった。いきなりやって来た馬場の綺麗で軽妙な技を見せ付けられた永岡は、負けて悔しいというよりも、東京にはこんなに強い者がいるのかと感動すら覚え、自分も東京へ出て本当の稽古がしたいという気持ちを抑えられなくなりましたのである。馬場はこの当時、講道館の二段を所持していた。その馬場に東京行きを相談してみると、「君は見込みがある」と喜んで講道館の山下義韶四段などに永岡の紹介状を書いてくれた。しかし永岡の両親は、彼が柔術を習うのでさえ近所から笑われるとして嫌がっていたので、柔道修行のための東京行きなど簡単に認めはしなかった。そこ

で永岡は、決意の固さを示すために友人の家に1週間ほど家出を図り、ようやく両親の許しを得るに至る。そしていよいよ東京への出発に際して、馬場らが永岡の壮行会を開催してくれることとなった。

(牛鍋屋で)やがて猷酬が始まったが、馬場君が真面目になって言うには、「オイ君、愈々東京へ行けば、同じ嘉納門下だ。是非ここで兄弟分の盃を交わそうじゃないか」と言い出した。どうするかと聞くと、刀で三人の腕から血を出して、盃に入れ、それを互に飲むのだという。私は愈々度肝を抜かれたが、青雲の志、胸奥に溢れている時とて、一瞬の躊躇もせず、その要求に応じた。そこで旗亭のすぐ隣の阿部という有名劍客の家の刀を借りて来て、左の腕を少し切って血を盃に受けた。(略)これがその痕です。(とて、永岡

七段は左の腕をまくって見せられた。そこには長さ5分ばかりの傷痕が明瞭に残っておった。)そこでめでたく兄弟の盃を済ませて私は愈々東の旅へ立ちました。

血の盃とは随分と芝居がかった作法のようにも見えるが、明治当時の青年の気風としては「望むところ」と応じるのが自然だったのであろう。永岡は講道館への期待と希望を胸に盃を交わした、と述懐している。永岡17歳、明治25(1892)年12月の上京であった。

晴れて講道館入門

柔道の専門家になろうと心に決めて東京へ上った永岡は、紹介状のあった山下義韶を仲介者に講道館で入門試験を受け、晴れて乙組への編入を許された。正式入門は年が明けた明治26(1893)年1月18日のことである。喜び勇んで稽古に臨んだ永

岡であったが、前述の様な岡山時代に慣れた片手を相手の腋下に入れた組み方では、講道館の自然体の組み方を前にして力の入れ所が全く解らず、先輩に投げられてばかりいたという。そこで、無闇に稽古衣にかじりつくのではなく、先輩の正しい技を目で見て頭に入れ、質問も重ねてそれを試してみる、という稽古方法を実践してみた。そうしてしばらく注意深く観察ばかりしていると、段々と組み方や稽古の仕方が理解できにくる。そうなると岡山時代に覚えた浮腰や捨身技の呼吸が生きてきて、上達は早まり、とうとう横捨身が永岡の得意技だと周りから言いはやされるまでになったのであった。併せて「講道館名物」と言われていた足技の稽古にも励み、明治27(1894)年9月には初段を許されることになる。

入門して数年の間、永岡は講道館

で修行するとともに、嘉納塾において漢学や英語をも学んでいた。そのころの永岡について、次のような印象深い逸話がある。明治27(1894)年の夏、講道館の先輩で友人でもある磯貝一が京都から夏稽古に上京したことがあった。磯貝は東京にいた間嘉納塾に寄宿しており、ある日、永岡と磯貝の二人が道場の当番にあたることになった。以下は磯貝の回顧談である。

当時、嘉納塾には毎日当番というものがあって、これに当たったものは、一定の時間、道場に頑張っておらねばならぬ。(略)どうしたことが、その日に限って、誰一人として稽古に来るものがない。夜も大分更けたので、「おい、もう誰も来んじやろう」「部屋へ帰って一休みするか」「よかろう」という訳で、道場の明りを消して部屋へ帰り、雑談に花を咲かせてい

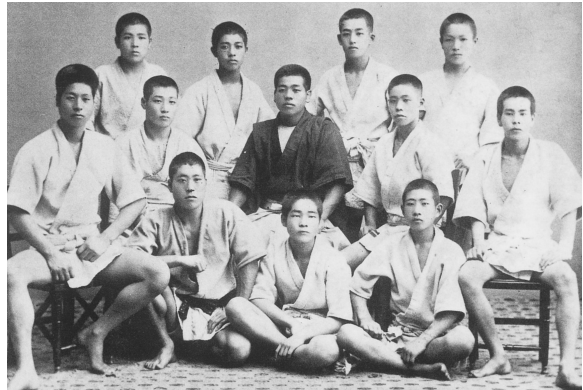
た。ちょうどそこへ（嘉納）師範が帰宅された。道場の明りは消えている。師範は自分達のいる居間へつかつかと入って来られた。自分はその時の光景、そしてその時、師範が二人に懇々と諭されたことを、肝に銘じてありがたく、未だに脳裏に、しっかりと焼付けている。「君達は知るまいが、私が道場を開いた当時は、一人の門人でも、喜んでその来るのを迎えたものだ。勿論その頃は、稽古の時間なども定めていない。何時来るかも知れない門人を、酷暑にも厳寒にも、吾々は道場に詰め切って、これを持ったものだ。そして、一人でも稽古に来るものがあると、ああ今日も一人だけ道が広まった。明日はまた一人でもよい。稽古に来てくれないかと、今日の喜びを明日の希望とした。嘉納道場に、当番を置くようにしたのもこの精

神からだ。或は一人も稽古に来ないかも知れぬ。然し来るかも知れぬ。一人にでも、二人にでも道は開いて置かねばならぬ。君等はこの道の指導者として、この理合は分からぬ筈はない。まづ、身をもって実践して貰いたい。」（略）自分と永岡とは頭を垂れて聞いた。言々句々、情理を尽くしての御話に、自分等は、穴あらば入りたい、非常な羞恥心と責任とを感じ、また、嘉納先生の偉大な精神力に打たれた。ああ、この崇高偉大な精神あつてこそ、嘉納柔道はここまで伸びてきたのである。ここまで発展して来た講道館柔道の礎は、正にこの精神力にあつたのだと、深く心を打たれたのであつた。永岡君も、しばし面をあげ得ず、涙を絞っていたようだった。¹²

どこかに無かつたであろうか。磯貝と同じように永岡もまた自らを恥じてその訓話に感動し、嘉納師範を範としていよいよ柔道を究めようという思いを強くしたという。これ以後、永岡の師範を仰ぐ気持ちは非常に固く、決して揺らぐことはなかつた。¹³そしてこの日は、嘉納師範の偉大さについて磯貝と二人で語り合い、お互いの柔道家としての将来を励まして夜が更けていったという。

19歳で初段を許された永岡は、師範の命により第一高等学校¹⁴の柔道教師助手を嘱託され、週に二度柔道部の指導を受け持つこととなった。自分より年上の学生も多かったが、永岡の技術と人柄で良い信頼関係を築いて指導に当たっていたという。この時の一高柔道部の学生には、後の内閣総理大臣・広田弘毅や後の講道館十段・正力松太郎¹⁵らがいる。また、柔道教師の仕事とともに、益々熱心

に自らの修行にも励んだ。当時講道館では、稽古をした相手の名前を帳面に書いておき、修行者らはその稽古記録を励みにしていた。永岡も仕事などで稽古に出られなかった日は、次の日一番に帳面を確認して、他の者がどれだけ進んだかを見、遅れるまいと必死に喰らいつく程に稽古に熱中したという¹⁶。他にも、砂を詰めた俵を何十回も持ち上げて腕力をつけ、身体を作り上げていった。そんな努力が実り、永岡は明治28（1895）年4月、初段から僅か半年で二段へと昇段を果す。更に翌29（1896）年の春季紅白勝負において、二段の修行者を6人も投げ飛ばし、抜群で三段を許されたのであった。先輩らを次々に追い抜き、異例の速さで昇段する永岡は、天賦の才とともに人一倍の精進を惜しまない真面目さも持っていたのであろう。そんな永岡を師範はとても可愛がっ



四段当時の永岡（中央の白袴姿）

ていたようである。永岡のことを「永岡丹波守^{たんばのかみ}」や「タンバ」と呼び、「タンバ、タンバ来い」と言っただけで、よく稽古の相手に彼を選んだという。永岡は岡山県出身であり、普通なら備前守となるところであるが、師範は以前観た歌舞伎の登場人物の名前

をもじって、永岡に丹波守というあだ名をあてがった。師範一流のユーモアであり、またそれだけ永岡に愛着を感じていたのであろうと考えられる。また、海軍にいた広瀬武夫は、永岡があまりに早く旭日の様な勢いで上達していくので、永岡のことを「旭將軍」と呼んでよく稽古をつけてくれたそうである¹⁸。そして永岡はその熱心さと勢いのまま、明治31（1898）年1月の鏡開式において早くも四段に列せられることとなった。23歳にして並居る先輩らを追い抜いて、僅か6人にのみ許された四段の1人となったのである¹⁹。これを見ても、いかに永岡の技が際立っていたか想像に難くないであろう。

横山作次郎との乱取

「一芸に達すると万芸に通ずる²⁰」と言われるが、永岡は横捨身技が大得意でありながら、足技も腰技も手

技も全て片寄らずに上手かったとい
う。横捨身は既に芸術の域にある、
と周囲から評せられており、その人
柄も手伝ってか、いつしか「業は捨
身、人は永岡」と言われるまでになっ
ていた。そんな中、明治32（189
9）年1月8日の鏡開式において、
当時最高段を所持していた横山作次
郎六段²¹と永岡が成年者乱取をするこ
とが決定したのである。この舞台に
上がる者は、前年中に特に稽古に精
進した者・進歩が抜群だった者など
で、とても名誉なことだとされてい
る。永岡は、選ばれたからには本気
で先輩にぶつかっていかうと決めて
いた。²²この乱取の様子は当時の講道
館機関誌「国士」に詳しい。

（鏡開式）最後の横山・永岡両氏
の乱取は、講道館始まって以来、
恐らくは日本に柔術始まって以来、
かつて見ざりし好取組にして、
（略）今しも、満場割るる計りの

拍手喝采に迎えられて、悠然現わ
れたる両雄、一は日本に敵なしと
称せられ、その驍名は夙に天下に
喧しく、数年来、数十度の戦場に、
未だ一回も敵に背を見せたること
なき剛の者、一はその名声前者に
及ばずと雖も、近年の進歩は旭日
昇天の有様にて、先進老功の輩を
凌駕する技量を有する年少気鋭の
士、

当日の組み合わせは、勝負を決
するを目的としたるにあらざれば、
いづれが勝ち、いづれが負けたり
しかを、判断すること難けれど、
永岡氏当日の成績は、平素の苦心
鍛錬を称し、師範は即日、氏を五
段に進められたる程なりき、今両
氏の組み合わせに付いて、最も感
じたる所を述べんに、横山氏、永
岡氏の仕掛けたる足払を返して、
反対に業を施せしは、頗る巧妙に
して、さすが老練の技量と感服せ

ざるものなかりき、此時永岡氏、
倒れたるを見る間に、ひらりと体
を転じて、相手に対して坐したる
動作は、電光石火の如く、殆ど傍
観者をして之を認むることあたわ
ざらしむる程なりき、尚進んで仕
掛けたる横捨身業は、さすが氏が
得意だけありて、さしもの大兵な
る横山氏を、美事横倒せしめ、満
場の観者をして、驚嘆おくあたわ
ざらしめたり、²³

「剛の者」の横山と「気鋭の士」
の永岡、講道館の誰もがこの組合せ
に興奮し、異常なまでの注目を注い
でいたことが窺えよう。乱取である
ため勝敗をつけるものではないが、
当日、血湧き肉踊る思いでこの乱取
を観戦していた佐村嘉一郎²⁴が後に語っ
たところによると

（永岡は）横山の燕返をくって空
で回転して落ち、蛙のようにうつ
伏せて両膝で受け止め、（この時

には既に)両手で横山の道衣の前をつかんでいた。横捨身は二度かけたが、流れてきかなかった。永岡の横捨身で、横山の巨体は一間も飛んだが、上半身は浮いていた。最後は横山の右足が後に退いた瞬間、永岡は左の膝車にとった。はずみを喰って、横転した横山を、永岡はピタリと崩上四方におさえた。ここで検証に立っていた嘉納師範は『よし、それまで!』と声をかけられた。

とあり、永岡の優勢で終わったと見てよいだろう。事実、この乱取の直後、師範は永岡を即日五段に昇段させていることからそのことが読み取れよう。

永岡は、講道館の中心的存在である横山と真剣に組み合って、優勢に終わったことを素直に喜んだ。そして、自分の成長ぶりに師範が五段を与えてくれたことも嬉しかったであ

ろう。しかし、周囲の人々は全員が手放して永岡を讃えはしなかった。先輩を投げ、抑え込んだことが一部で問題視され、永岡は苦しい立場に置かれてしまったのである。永岡はこのことで随分悩んだようであるが、結局しばらく東京を離れた方が良さであろうという師範の計らいで、兵庫神戸市に在る師範の従弟・嘉納徳三郎の所へ身を寄せることとなった。

兵庫では心機一転、県巡查教習所や第一神戸中学校で柔道教師を勤め、また明治36(1903)年には京都に移り、先に京都に赴いていた磯貝一とともに大日本武徳会本部と武道専門学校教授職に就き、磯貝を助けながら関西への講道館柔道普及に努めるのであった。翌37(1904)年10月には、磯貝と演じた古式の形が師範に認められ、二人揃って六段へと昇段する。この頃には、横山・

山下らの「講道館四天王」に続いて、「磯貝・永岡時代」という双璧の称号を恣にするのであった。

講道館指南役として、師範の恩を胸に

明治45(1912)年1月に36歳で七段へ昇段した永岡は、翌大正2(1913)年、嘉納師範より東京高等師範学校の講師を依頼され、約12年ぶりに再び上京する。東京では、帝国大学や中央大学等の教師も委嘱されると同時に、講道館指南役にも任命され、愈々後進の指導に力を入れていくこととなる。永岡の指導は、非常に理論的に、かつ懇切丁寧に細部まで説明するというものであった。生徒らの質問や疑問にも的確にピタリと答え、重ねて惜しまず実演して技を教えていた。また永岡は、二、三段を相手に稽古をする時は右大外刈や左釣込腰でこなし、めったに彼の得意技とされる横捨身は出さなかつ

た。生徒らは、なんとか横捨身で投げられるまでになりたい、と稽古に励んだという。²⁷そして大正9（1920）年3月には八段、昭和5（1930）年4月には九段と昇段を重ねていったのであった。

九段に列せられてからも、名誉ある天覧試合にも出場するなど精力的に柔道に携わっていた永岡であったが、未だ実現していない望みが一つあった。それは、海外へ指導に赴くことである。かつて富田常次郎²⁸がアメリカに渡る際、共に永岡も行く約束をしていたのだが、諸事情でそれが叶わなかったことがあった。²⁹それから30有年、昭和9（1934）年になって嘉納師範が柔道の普及また世界柔道連盟結成の目的のため欧米諸国を歴訪するにあたって、永岡を供として連れて行ってくれたのである。永岡は、この時自分を渡航させてくれた師範への感謝と感激を生涯

忘れ得ず、本当に有難かった、と後に何度も述懐している。そして約半年に亘ってイギリス・フランス・アメリカと柔道の講演や指導を行い、現地の新聞を賑わすなど、大いに柔道の普及宣伝に尽したのであった。³¹



Professor H. Nagaoka, 60-year-old jiu-jitsu inst of Tokyo's metropolitan police, shows Detective C. Larson, a member of the radial squad, how to disarm him by jiu-jitsu. The professor demon his methode at the Chicago detective bureau. (C) American photo.)

シカゴの新聞に載った永岡。探偵に短銃の防禦法を指南する。

昭和12（1937）年12月、62歳にして、永岡は現役の柔道家として初の十段を授与される。先輩で友人でもある磯貝と共に、柔道普及の功を高く評価されることであった。岡山で柔道と出会い、柔道家として身を立てられたのも、要所々々で自分を導いてくれた師範のお蔭に他な

らない。と、師範を親以上に慕ってきた永岡にとっては、師範の恩に深く感じ入らずにはいられなかったであろう。しかし、この後半年もせず師範が亡くなり、支那事変が起こって戦争が拡大していく中、講道館の置かれる状況はめまぐるしい変化を余儀なくされる。政府の外郭団体となった武徳会の包摂団体の一つに組み込まれ、また終戦後は学校柔道を禁止されるなど、講道館にとって厳しい時代が続いた。そんな中でも永岡は、「私は嘉納先生に育てられ、引き立てられ今日にまでなった。この御恩は一生忘れられない。忘れていいものでない。たとえ講道館がこの際どうなろうと、私は一身の栄達のために講道館を去るとか見捨てられるものではない。私は嘉納先生のためにも講道館で死ぬのだから、私の肚は決まっている」と周囲に語っていた。³²永岡の、師範へのそして講道

館への想いを察するに余りある言葉であろう。

その後、昭和26（1951）年に至って学校柔道が復活するなど、講道館も以前以上の活況を取り戻すまでになる。そして、昭和27（1952）年11月22日、講道館創立七十年の記念式典が開かれ、永岡はそこで晴れの門人総代として祝辞を述べることになっていた。講道館に入門して60年、様々な気持ちが出来していたのであろう、前夜遅くまで祝辞の練習をしていたそうである。しかし、式典当日の未明、突然の心臓麻痺でこの世を去ったのであった。享年77歳。永岡はその功績が評せられ、講道館葬が仏式にて執り行われた。戒名は「柔敵院釈秀温居士」、永岡の人柄と柔道一筋の人生を良く言い表したものであろう。

（図書資料部）

※引用文献は、現代漢字・仮名づかいに改めた。

※「和而不流」は永岡十段が好んで揮毫された文言である。

《主要参考文献》

「永岡秀一十段略年譜」『天才永岡十段』古賀残星著 春歩堂 昭和29年

「業は捨身、人は永岡」櫻花生著 『柔道』第2巻第2号（大正4年2月）

「永岡秀一十段を偲ぶ」座談会 『柔道』第24巻第2号（昭和28年2月）

《その他典拠・註》

1 永岡先生墓碑銘（口絵図版）『天才永岡十段』古賀残星著 春歩堂 昭和29年

2 少年時代の永岡は、苦味チンキ（苦味の強い健胃剤）を常用している程であったが、柔術・柔道を始めたことにより健康体になっていったようである。

3 「岡山市」『岡山県柔道史』金光彌一兵衛著・発行 昭和33年 同書によれば、練武館での教授は野田の他に岸本重太郎が担当していたということである。

4 「私の得意技 永岡十段訪問記 捨身技の話など」『柔道』第18巻第2号（昭和22年7

月）

5 後の講道館三段。講道館の草創期に活躍するも、明治30年愛媛県において24歳で早世。（「講道館柔道創設時の破滅型の天才、悲劇の柔道家馬場七五郎の写真発見」橋口秀雄著 『柔道』第74巻第9号（平成15年9月））

6 後の講道館初の十段

7 「業は捨身、人は永岡」櫻花生著 『柔道』第2巻第2号（大正4年2月）

8 「先づ一つの業の根本を究めよ」永岡秀一著 『柔道』第2巻第10号（大正6年10月）

岡山時代の組み方を永岡は「自護体と自然体との合の子といったような姿勢」と表現している。

9 「得意技苦心談」永岡秀一著 『柔道』第14巻第11号（昭和18年11月）

10 前掲註8参照

11 後の十段。この当時、京都第三高等中学校の柔道教師として京都へ派遣されていた。

12 『磯貝一口述 わが七十年を語る』長谷川泰一著 赤心同盟会東海支部発行 昭和15年

13 「永岡先生を憶う（二）」工藤一三著 『柔道新聞』第28号（昭和27年12月20日）

- 14 東京大学の前身の一つとなった旧制の高等学校。通称「一高」。
- 15 「父 永岡十段を語る」永岡俊一著 『柔道』第43巻第5号(昭和47年5月)
- 16 「柔道漫談会」(座談会) 『体育と競技』第8巻第5号(昭和4年5月)
- 17 『天才永岡十段』古賀残星著 春歩堂 昭和29年 歌舞伎「大徳寺」の登場人物である長谷川藤五郎秀一丹後守が永岡と同名であり、師範はより語呂の良い丹波守に変えてあだ名としたという。
- 18 前掲註15参照
- 19 当時、上には六段に横山作次郎と山下義韶、五段に富田常次郎と西郷四郎がいたのみである。
- 20 前掲註8参照
- 21 後の八段で講道館指南役。講道館四天王の一人。
- 22 「十段物語(上)」古賀残星 『柔道』第36巻第4号(昭和40年4月)
- 23 「講道館彙報」鏡開式 『国土』第5号(明治32年2月)
- 24 後の十段。明治31年に講道館に入門し、この当時は初段であった。
- 25 前掲註22参照
- 26 「校友会誌」第38号(大正2年7月) 大正5年には教授となっている。
- 27 前掲註22参照
- 28 後の講道館七段。明治39年柔道普及の為渡米。
- 29 「第四回講道館懇話会」『柔道』第5巻第6号(昭和9年6月)
- 30 「英米柔道行脚」永岡秀一著 『柔道』第6巻第2号(昭和10年2月)
- 31 永岡は海外の新聞に写真入りで紹介された。だが渡航前にも、三越で生まれて初めて洋服を誂えた所あまりに肩幅があったため衝立のような洋服になってしまい、そのことが新聞沙汰になっている。
- 32 前掲註13参照
- 写真典拠
『柔道』第24巻第2号(昭和28年2月)
『柔道百年の歴史』講談社(1970)
『柔道』第5巻第11号(昭和9年11月)

講道館創立百二十周年記念

術から道へ

ビデオ

明治十五年(一八八二)、嘉納治五郎師範が講道館柔道を創始されてから二十周年を迎える。柔道はオリリンピック種目となり、人類、言語、政治、宗教などを超越して一八〇を越す国々に広く普及している。柔道はなぜこのように世界に広まったのだろうか。創立百二十年を機会に日本の文化として世界に誇る柔道がどのような形で生れ、どのように広まっていったのだろうか。嘉納師範の技と心を改めてふり返る。

企画・制作・監修/財団法人 講道館
制作協力/精華プランニング

定価 三、六七五円
(本体三、五〇〇円)

送料 実費

◎お申込・お問い合わせ先

〒一〇〇〇〇三

東京都文京区春日一六一三〇

講道館 総務部

TEL 〇三三八一―七二五五
FAX 〇三三八一―八三六一四